

知覚の哲学の動向

前田 高弘
無所属

国内外における知覚の哲学の動向について、心の哲学との関連に注意しながら概観することにした。

知覚の哲学は、英語圏の分析哲学の系統に属する哲学界において近年活況を呈している分野の一つとあってよいと思うが、日本でもこれを反映するように、この分野に手を染める人が増えてきているようである。ただ、日本で「知覚の哲学」というと、フッサールやメルロポンティの現象学を連想する人のほうが依然として多いかもしれないが、ここでは特に英語圏における心の哲学の動向と密接に連動して展開されているそれを指す（その内部で現象学的洞察を取り込もうとする動きもあるが）。

もとより、知覚は心の作用の一つ（それも主要な）であるから、知覚の哲学が心の哲学の中で主要な位置を占めていても不思議はないのだが、実際のところ現在のようにそれが主要な位置を占めるようになったのは比較的最近のことであるように思われる。その主な背景としては、心の哲学の中での志向性に関する議論の進展と意識の問題に対する関心の高まりがあると考えられる。

志向性に関しては、信念や思考をある種の表象内容をもつ心的状態として捉えたうえで、その内容の特性やその内容をもつための条件などに関する問題が80年代から90年代にかけて盛んに論じられた。それとほぼ同時期に、知覚内容に関する問題が主要なトピックとして浮上しているが、それは信念や思考に関する議論によって触発された部分が大いであろう（特に外在主義や非概念的 content の問題など）。

他方、意識（特に現象的意識）に関する重要文献がとりわけ90年代に相次いで登場しているが、これも知覚の哲学への関心を喚起するのに貢献したであろうと想像される。80年代まで志向性をめぐっては、志向性の問題を意識の問題と切り離して追究するのが一つの潮流を成すアプローチであったが、意識の問題に対する関心の高まりはそれに対する反動（ないし反省）として捉えられる側面もある。そして、志向性と意識の関係を追究するならば、知覚の問題に注意が向くのは自然なことである。知覚経験は、志向性と現象的意識が密接に関わりあっているように思われる典型的事例であるからだ。

私の印象では、知覚の哲学が近年活況を呈するようになったのは大体以上のような事情による（私自身そのような経緯で知覚の哲学に関わるようになった気がする）。本発表では、そのあたりのことを説明するとともに、知覚の哲学の最新の主要なトピックや国内の研究状況などについてコメントしたい。